

報



會

會 岳 山 本 日

71

月 二 十 年 二 十 和 昭

登山と報國

冠 松 次 郎

この間ある山岳會で「登山報國の夕」と云ふ會を催した。その會で講演を頼まれて少しばかり話をしました。

これはその時思ひついて前おきにしたこと柄であります。

登山報國の夕或は皇軍慰問の夕と云ふやうな催を、山岳會として發起したことは、私の寡聞では最初のやうに思はれます。それは洵に時局に適應した結構なことだと、私は非常に愉快に思つたのであります。

併し考へて見ると、實は今日まで山岳會が主催で、かう云ふ趣旨の會をやる機會が今くなくかつたやうにも思はれます。

回顧致しますと、この前の滿洲事變や上海事變の折には、如何にそれが重大時局であつたにせよ、局地的に收拾出来る見込みもあり、國運を堵してやる程深刻でもなく、スケイルも小さかつたのであります。従つてまだから云ふ催をやる程登山者の心も切逼してゐなかつたことと思はれます。

その以前にあつた歐洲大戰のときには、日英同盟にひきづられて英國の爲に青島を攻略し、我海軍では濠洲よりの派遣軍の輸送を護衛し危險を冒して遠く地中海まで遠征した。

併しこの時も我國としての時局は勿論今日程重大ではなく、英國との友誼上の云はゞ加勢に出たのでした。その英國がどうでせう。今日では全面的に我國に對して好意を持つてゐない。日本國民をして激怒せしむる程の仕打が見えます。

凡そ國際政局程出鱈目なものはない。それは紳士的な假面を冠つて、實際は利害によつてのみ動く云うても過言ではないと思はれます。

それから歐洲大戰以前の國家的大事件は云ふまでもなく日清、日露の戦役でせう。これは勿論國家の運命を堪した今日の時局に劣らぬ重大な危局でした。併しその日清戦争の頃には山岳會は愚か登山家などと云ふ名稱さえなかつたでせう。その頃の登山と云へば、富士講、御嶽講など、云ふ宗教的登山だけが認められてゐたのです。

日露戦役即ち明治三十七八年戦役のときでせう、まだ日本には山岳會の出現を見なかつたのです。日本最初の山岳會である日本山岳會の誕生が明治三十九年四月です。

併しその時分には、もう講中登山でなく山そのものに興味をもち、山の自然に憧れて行く登山者が默々として高山深谷に潜入してゐた。小さいが有力なグループさへ出来てゐたことと思ひます。

明治三十七八年前後と云へば、その頃程青年の心の動搖してゐた時は少いでせう。眞面目な青年は何か自分

分等の心のおき處になる大きなものを求めてやまなかつた。それが求め得られなければ結局人生は無意義で勞働は盲動に過ぎないときへ思つてゐたのです。爾來三十五年の今日になつて顧みても、私はその頃の強い精神界の動きを感じずにはゐられません。

あの有名な青年哲學者藤村操が、巖頭の感を残して華嚴の瀧に投身したのもその頃です。この深刻な思想界の動搖は、精神的の空虚を満さんとするその急潮は、幾多の哲學家宗教家をその渦中に巻き込みました。

見神、見佛と云ふやうな告白が高唱された。我は豫言者であると云ふ人、無我の愛を提唱する者、半獸神を絶叫する人など、實に我が精神界は深刻多端であつた。青年の中には生きても行けず、さうかと云うて死んでも行けないと云ふやうな生死の關頭に喘いだ人も多くあつたやうです。

かう云ふことは登山界には全く無關係のやうに思はれますが決してさうではありません。その頃の青年であつた私のやうなものさへ、この動搖に巻き込まれて、何か大きなものを希求する。そして自分をそれと一つにしたいものがいたのです。

併し考へて見ると、神佛と云ふところで、それは漠然として洵に捕捉し難い。霞一膜を隔て、物を見るの感をとどめ得ない不満足をもつてゐた私は、結局大きな自然に眼をつ

理事改選に就て

本會々則第十二條に據り理事定員の三分の一（五名）を改選致す事と相成候、就ては去る十一月二十五日の役員總會及び其後の理事會に就て理事改選に關し審議の結果左の如く決定致候

一、退任者（就れも任期満了に就き）
森田勝彦氏 田口一郎氏
櫻井信雄氏 磯野計藏氏
別宮貞俊氏（關西）

二、役員總會推薦の候補者は左記五氏と決定夫々各氏の承諾を得候
野口未延氏（大正十一年四月入會）
吉澤一郎氏（大正十四年九月入會）
早川義郎氏（昭和九年二月入會）
石原 巖氏（昭和九年九月入會）
宮崎武夫氏（昭和七年五月入會）
（關西）

本會役員總會は前記五氏を明年一月より就任せらるべき理事候補者として推薦致候

「理事選舉に關する細則」の諸項により理事候補者を推選する、向は来る十二月十五日迄に本會事務所に到着するよう候補の氏名を御通知相成度、其締切後、候補者全部の氏名を全會員に通知致し、投票を求る筈に候、尙候補者推薦に就ては會則「理事選舉に關するもの」御参照被下度候右御通知旁々得貴意度知斯御座候

昭和十二年十一月

日本山岳會役員總會

敬 具

けたのです。その大きな自然の最も原始的で雄大崇高なる山岳の懷に私は飛び込んで見たいと思つたのです。私の目的は全く人氣の少ない荒寥たる山の自然であり、その頃の日本アルプスがそれに最も適當な道場であつたのであります。

山は高いほど、谷は深いほど私の要求を満足させたのです。それでありましたから私の低山趣味から出たのではなく、先づ最もワイルドな高山深谷から出發したであります。

話しが大分枝道にそれたやうですが、兎に角登山へかう云ふ傾向から入つた人も、その頃には相當あつたことと思はれます。

登山報國と云ふことに戻りますが私等は生物として人間に生を享けたことを喜ぶものであり、更に日本國に生れ、日本人たることに此上もない幸福と光榮とを感じるものであります。かう云ふ非常な時局に際會するとき、今更ながそれを痛感せずにはゐられません。

私等が山へ登るのは勿論自然に憧がれ山を愛するその爲であつて、お國の爲にと云ふ考へでは實の處山へ登つたことはないのであります。併しこの登山の行爲が、私等の精神を純正にし健康を増進する、その事によつて自然とそれが國家の進展に添ひ、民族の發展に寄與する、期せずして報國の一端を爲すと云ふことは誠に有難いことゝ云はねばなりません。

必ずしも登山と云はず、現今青年の體質の低下せると云はれてゐる時スポーツこそ實に國家興隆の一大要素であつて、日進月歩愈々隆盛に向つて行くスポーツ界を見ると、私等は實に名狀しがたい力強さを感じるものであります。

人々はその傾向、趣味によつて自己に適應するスポーツを選ぶことが勿論よいと思ひます。併しスポーツの種類によつては、不均等に身體を運動させる爲、却つて有害なものもないと云へません。

私等は自分の傾向からスポーツとしても登山を禮讃するものであります。

凡そ歩くと云ふこと程、身體を平均に運動させることはありません。その意味で登山、ハイキング共に頗る健康的であると云へます。

就中高山峻嶺の登攀となると身は清澄なる山嶺の氣に淨められ、心は無限の宇宙に滲透して行く。それだから登山にはスポーツの境を絶した詩趣と宗教味が充滿してゐます。而してその遊戯三昧が自づから國運の興隆に資すると云ふことは洵に自然法則と云はなければなりません。登山は國家的に考へても實に無用の用であると云へると思ひます。

會費拂込について

本年度會費未納の方は至急御拂込み願ひます。

巴里便り

藤 島 敏 男

暫く御無沙汰してゐる内に、この巴里ではもう暖房のいる季節になりました。

今年の夏は伊藤秀五郎君と、七月の下旬から八月にかけ、二週間ほどスイス、北伊太利の旅を共にしました。グリーンデルワルド滞在中に、故辻村さんの好きだつた、ブリュームリスアルプホルンに登つたり、グリーンデルワルドの村の小徑を散歩し乍ら先輩友人の棚卸しをやつたりしました。グリーンゼルの峠をローンの谷に越えて、ツエルマツトに三日、シユワルツゼーからスターフェルアルプへの散策にヴァレーの山々を近く眺め、一夏や二夏ではどうにもならないといふ感を深くしました。

シンブロン・パスをドモドツラへ越して、あとはロカルノ、ルガノ、コモと湖水に沿ふ町々をめぐるつて、コモの湖の北方、瑞伊國境に近いキヤベンナの町で伊藤君と別れ、僕はサンモリツツの方へ、マローヤの峠を越しました。

盛りの時のサンモリツツは英國の殖民地みたいで、聊か辟易、セガンチニ博物館だけで失敬してユリア・パスをラインの谷へ越して下りました。

そうして再びグリーンデルワルドに戻つたのが八月のなかば。下旬にはサミュエル、フリツツの兩プラバンドの眞中に挾つて、ユングフラウ

ヨツホからグリーンゼルバスへ出るまでの七日間にメヨンヒ、グロース・ファイシエルホルン、グロース・グリュンホルン、フィンシテラトルホルンに登りました。夜明け小屋を出るときは、月明に恵まれて、一度もランターンを使はないといふ譯でしたが、頂上に立つ頃は雪がチラチラと降つて遠望きかずといふやうなことが多く、寫眞をうつす手間が省けました。

この旅から歸つて、暫くしてからこんどはフリツツ・ゾーデル、フリツツプラバンドの兩フリツツの眞中に挾つてツエルマツトに出掛け、チナール・ロートホルンとマツターホルンに登りました。快晴に恵れておおよそ名のある山はみな見えたといふやうなものでした。登りたい山はいくらでもザラにありますすがさう足をのばすに際限がないので切り上げました。

さて、いま巴里の屋根の下で、夏の山旅を振り返つてみると高い山に少し慣れたといふだけで、別に技術が向上したとは思はず、誠にJ.A.C.會員としてお恥しき次第ですが、ただ自分としてよき思ひ出となるべき幾日かを過したことを満足に思つて居ます。

× ×

會員田口一郎君が九月中旬巴里を訪れました。田口君は八月上旬大西洋を渡つたにも拘らず、歐洲へ來たら何はともあれ瑞西はグリーンデルワ

ルドへと馳け付けなかつた罰が當つて伯林などといふヨーロッパの片田舎で馬鈴薯ばかり食はされて居る間に、瑞西の山水に接するの機会を失くして了つたやうで大變残念がつて居りました。巴里では折角新進登山家田口君が來ても、山と名のつくものは、モン・バルナス、モン・マルトル位のもので標高からも山容からも到底吾人の趣味に合はないので、かといつて目下開催中の萬國博覽會へ行けば、パレスティン國より貧弱な日本館に肩身の狭い思ひをするだけなので、終局郊外を歩いたり、美術館を訪れたり、あとは虎ノ門のJ.A.C.集會室でやるやうな駄辯に時を過したものです。

田口君の他に會員桑原武夫君が來てゐます。桑原君はグルノーブルで夏を過し、伊太利の旅をすませて歸つて來る筈です。旅の話をきくのを楽しみにしてゐます。その他會員田邊多聞君、目黒四郎君なども巴里に來るごとに寄られました。平地旅行に忙がしく中々山に取付く暇はない様子でした。

× ×

秋が深くなつてゆくと、日本ならば小春日和の續く頃ですが、こゝでは晴れる日は稀になつて戸外よりも室内の方が好ましくなります。來春は印度洋を東へ向ふ船客の一人となるので、今の内緒々呑氣にやつておかうと思つてゐます。草々
十月十九日 於巴里 (島田宛)

山登りについて (三)

ヤンク

岩登り——は方法よりも實地に關する事柄で、またその様々の傳統は場所により時代により相違がある。根本的に云へば岩登りには力の強いことよりも、巧みにバランスをとることが一層肝要であり、そのためには太い筋肉や局部筋肉を働かせるよりも、手足を正しく同じやうに共働させる方がかへつて有効である。

「人眞似小眞似といふやうに」、何事によらず模倣は一つの有効な修得方法である。岩登りの修得についても同じで、しかもこの場合の模倣は無意識にさへ行はれる。すべてのスポーツでも同じ事であるが、岩登りに於ても、近頃の若い人達を見ると、技術に關する様々の文獻を漁つたり岩登りの特有な雰囲気を感じ得たりするが、ともあれ、曲りなりにも岩登りを模倣する下地がチャンと出来上つて居り、またかくして岩登りにはすでに本能的な適應性さへ獲得して居るのであるから、實地に當つてはたゞそれを要求される技術に應用しよへすればよい程までに訓練されてゐるので、我々は大いに助かるわけである。初期の先輩者達がその登攀技能の修得に要した長い鍛鍊時代のこと、これから岩登りを始めやうといふ人達には必要

あるまい。岩登りの安定さと技倆の水準とから見て、過去四十年の間に岩登りは著しい向上發展を遂げてゐることは明瞭であるが、その度合についてはこちらに判りと斷言はできない。

しかし登攀に適した資格を備へ得たからといつても、これを以つて直ちに規模の大きい山登りに關しての細目を修得し經驗しつくしたとはいへない。岩登りは廣い意味での山登りの一小部門にすぎない。かゝる登山には、肉體、精神、神經が甲乙なく同格の素質までに鍛え上げられることが必要なのであるが、現實に於ける登山の艱難——それは頑強な山岳の抵抗と之に對する人間のとかくの不完全さから生れる種々の人間的な諸條件とが錯綜し、組み合せられたものであるが——この錯綜せる諸艱難に實地に遭遇して見なければ、かゝる修得は期せられない。それがためには倦むことなく、丹念に實地と體驗とを積むことより外にないことは今日でも昔でも變らない。他の理由もないではないが、今日の岩場専門家は岩登りの技術は完成してゐるもの、それ程までにまだ、かゝる意味の登山技術は物にしてゐないのであり、この範圍では尙ほ相當發展の餘地が残されてゐるやうである。

我々の力量が惜みなく發揮せられ自己の協同連繋が思ふ存分に行はれ登つてゐても愉快で耐らない。さういふ心境に入り得る程に、バランスのとれた動作が平易、圓滑に行はれるやうになること、これが岩登りで期待されてゐる目的である。たとへ急斜面にあつても、いつも自信を以つて、次に如何なる動作をなすべきかといふことを冷靜に判斷し得るのは一つに我々が平易に運動し得るからなのである。平易なる動作といふのは、要するに、その動作に無意識的に間斷なく適應し得ることである。一系りの登攀動作が一々に意識的な指示なしに全く無意識の裡に行はれ得るやうに練習すればかうした適應性は自ら本能的に働くこととなる。がかうなつて了へば運動は單に自動的な反覆動作となり、たゞ習慣によつて、眼で豫め見當つたホールドに應じて、四肢や體は自らそれに向つて動いて行くやうになる。かうした動作の練習は、同じやうなホールドに向つて同じやうな動作を反覆することによつてつけられる。我々が岩のテイテイルを深く研究して見ると同一種に屬する岩の面は略々同じやうな特徴を有つてゐることが分つて来る。そして、この岩質に對する知識をよく呑み込んで置けば、それ迄に出喰はしたところのある性質の岩面ならば、その知識を充分に使ひこなし、身體はたゞそれまでに修得した動作をくりかへすだけで、しかも少しも無駄のない手足のホールドさへ得られるやうになることも分つて来るのである。(尤もこのホールドはいつも同じ順序で出會はすの

ではないが。)

かうした無意識的な適應性が確かに自分のものになつて了へばもう大丈夫で、様子のよく知れた岩場の所で、種々の場合場合にこの適應性を應用する。かゝる機會が多ければ多いほど、一々豫測したり指示したりせねばならない餘分な注意力は益々少くなり、また我々が一意意志や筋肉に刺激を與へる必要も益々少くなり、その結果我々のうちに留保される力は却つて益々多くなり、また膽力の擾亂されることも益々少くなるわけである。

我々の修業時代に於ける最も適切な練習方法は、長いリツヂをトラグアースしたり、略々均一の岩質を有する長いバットレスを、漸次困難の度を増しつゝ登降したりすることである。英國ならば幸にして様々のバットレスがあるし、アルプスならばそれが雪や氷で複雑な状態になつてゐる。

きわどい岩の上で練習したり、曲藝的な離れ業を演ずることは我々の目的ではない。熟練者が特に難しい業に適應する自信をつけやうとするならばかゝる離れ業の訓練も有益には相違ないが、しかしこんな眞似を初心者ややつて見た所でそれは失敗するに相違ないし、たとひ、成功するとしても、彼を誤り傷けるものとなるばかりである。こんな眞似をいくら練習して見たとて、それによつて彼の變則的な技能が少しも正しい

方に矯めされるわけなし、彼の山登りの第一期がこれによつて害はれるにすぎない。

機會の許す限り始終間斷なく練習を續け、その回数度を度重ねることが初心者としての最もよい練習方法である。かくすることによつて、初心者には、登攀下降トラグアースの何れの場合にも同じやうに自己の力の範圍に於ては自己の能力によつて確實に動作し得るやうにならねばならぬ。目先のきかない冒險好きなりーダに誘はれて、自分の力では安全限界を保ちきれないと判かり乍らそんな冒險をやつて見たくなるのは初心者の通弊であるが、安全限界を保たねばならないといふ第一原則を無視してまでかゝる動作をしやうとするのは正常な判斷を練る方法とはいへない。他の者に縫ひながらしかも自己の技能、體力を最大限に費してまで登攀技術を練習する必要は決してない。要するに岩登りに必要とされてゐる四肢の釣合つた協同連繋とリズムとは自信のある動作から生れるものであり、自信ある動作であればこそ、登攀にリズムが生れるのである。眼と感覺とによく合致してゐるリズムを先づ容易な岩場で修練し、その上で難しい岩場へ持つて行つて應用するのが練習の順序である。ともあれ、我々としては愉しみのために登攀してゐるのだといふことを忘れてはならぬ。登攀に於ける様々の場合種々な状況に處して、自ら

肉體を以てこれを體得し自ら精神的に之に對する處置を講じて行く、かうした體験を自ら積まないのでは、その登攀には眞の満足も見出されないし、眞の苦樂の思ひ出の種も残されないわけである。

現今岩登りの水準が著しい向上を來したのは一つには自動車の發達しおかげである。かつては一年の間せいぜい三回位の登攀を試みて大物をやつた積りで満足するより外なかつたのが、現今では殆んど週末毎に所々方々の岩場に親しむことさへできる世の中である。だから岩登りの修業期間は短縮される一方だし、眼手足の間の協同連繫も從つて急速に修得される。以前には、大して難くしもないやうな高さ、斜面で「危いのぢやないか」といふ妄想に迷はされるものがあつて、それが岩登りにかなり障害となつたけれども、しかし現今ではこんな妄想は、實際にも體験し了され、よく話しにも出てくりかへされてゐることなので、我々にとつてはもう日常茶飯事となつて了つてゐる。偶々ある不慣れな者が見なれない環境に飛び込んで自らの妄想に囚はれることがあつた。このやうな場面に迷ひ込んで了つても、現今の山慣れた常連ならば、その先きがかうなるといふ大體の見透しがついてゐるから、この場合に善處する方法を考へ出して、それだけで簡単にその場をきりぬけて了ふことができる。かういふやうに、技

術の進歩、その修得の迅速なことは驚くほどであるが、その進め方はよく考へねばならないし、登攀の各段階も至つて速かに修得されるが、この各階梯は正しい順序をふむべきである。さうでなければ、精神的並に肉體的の準備に一の間隙が残されることになり、それが原因で、破綻や不注意からの危殆に面して致命的な結果を來すことになる。ともあれ、この場合精進することは耻でも何でもない。自己の確信とそれに出發する慎重な注意力を以つて容易な岩場の上を運動し得ること、このことを先づ第一に修得しない限り、いかに離れ業のレコードを保持しやうとも抑々の發端を修得なかつた彼はいつまでも劣等なる登攀者たるを逃れない。登攀の様々な仕方、ホルルドの各種、その説明はこゝには省略する。ともあれ、上達することが目的であり、力を節約することが法則である。愉しみのために努力するのであるが保安といふことが厳格な限界なのであつて、自個と困難な斜面との緊密なる關係、その根本的條件に基いて我々の判斷を下し、技能を發揮すべきである。

ロープのこと——映畫や低劣なジャーナリズムから見れば登山者の世界は作り噺やきは物に出て來るほの暗い世界としか見えならしいが、ロープもそんな世界のうちでちやうどギリシャ劇の「運命の緒」をつくり

の傳統的役割を引ついでゐる。そこでこの世界をバックに一人のヒーローが登場するとしやう。しかし至つてロマンチックな彼は持ち前の猪突な性質からそんな運命の緒などの御世話にならないと大見得を切ることにすれば、筋は彼の思ひ通に運んでその先が面白くなるのだが、筋はさうは行かず氣まぐれな彼は最初の意地をどこかへ失つて了ひ、芝居半ばで脆くも女神の緒に縋り乍ら雲の上にまひ上がつてだらしない幕になるかもしれない。それでは餘りにあつけない、もし悲劇的の筋をお望みとあらば若人は前の場面と反面に最初から素直にその運命の緒に縋るといふ事になれば、或は場面はそのうらをかいて女神の氣まぐれにあつて、この緒はその魔法の鉄によつて容赦なくチョンギられて了つて幕になるかもしれない。ともあれ、岩登りが大流行になつた今日、休みの日に、人の集まる岩場に行つて氣をつけて眺めてゐると、かうした芝居をつくりの場面がいかに廣く一般に受けてゐるかがはつきりと納得されて來よう。そしてまたロープの使ひ方、その使ふ目的についても全くヒヤリとさせられる誤解さへ擴まつてゐるのではないかと全く心配にたへない。ロープの使用目的は、未熟者に觀察豫測、判斷の機會を與へ、肉體の適應性を附與するためではなく、また物質的に缺けてゐる我々の「安全」さを精神的に補ふためでもない。

或はまた熟練者は自らの體験によつて力を節約し得るものだが彼をロープのまき上げ係のやうに見做して、彼からかうした餘裕力を引つぱり出さうといふ手段と考へてはならない。ロープは正當に使用されさへすれば、バアティの肉體的及び道義的能率はこれによつて「共同」になり、安全限界はバアティ全員と剩すところなしに包括することができ。しかしこの「共同」といひ「限界」といふのもアンザイレンされてゐるバアティ總體の合一された能力や能率以上のものでは決してあり得ない。バアティのうちの一人でも未熟者であれば、その經驗と能力との不足と無思慮が原因となり、そのために總體の共同が削減される。それが低下すればするほど、また限界を侵害することが大きい程、それだけバアティ總體としての能率水準も自ら引き下げられざるを得ない。従つてバアティのうちの一人がどんなに優れてゐても、彼の能率は自ら引き下げられることとなる。繰り反して言ふが、ロープは未熟者の個人的責任を軽減するために使ふのではない。ロープをつけるとかへつてその個人的責任は増加さへする。ロープが解かれてから再びまき戻されるまでの間そのロープ上にある各員は自己に對する責任の外に、各單獨者として惹起すべき危險、過失に對しても責任を負ふものである。

ロープの使用について第一に考慮すべき事柄は、使用すべきロープの状況を點檢し常に明にし置くことである。ロープの強さはその撚り目の僅かな撚り傷、指先ほどの弱目も重大な關係を有つてゐる。バアティの一員によつてロープが無造作に捌かれ、このためロープの共同的道義的意味が全く失はれて了ふ事がある。いかに立派なロープでも、それが拙劣な確保によつて岩の間に不用意に挟み込まれ、僅かな磨擦が加へられれば、極めて危険な代物となつて了ふのである。

第二には、各自が必要に應じて種々な結び方を結び得るやうに平常から練習して置くこと。各人自身のためばかりでなく、他の者のためにも迅速且つ確實に結び得ること。そして登攀の間にロープの長さを確實に調節し得ること。先づこれだけの練習を経なければならぬ。この訓練が充分に出来上つたならば、今度は先づ安全な岩場へ出かけて行つて、實地に、ノットを作つたり綱輪を身體に合せたりすることを正確に自動的行ひ得るまでに練習する。ロープ使用の方法は先づかうした階梯に従つて訓練されねばならない。

しかし熟練者は岩登りの持ち味を自ら靜かに味はつてゐるうちに次第に昂じて來て、その地味な持ち味のうちにハハラとさせられるやうな氣持を見出したいといふことになるのだが、こうした場合の氣持の變化を體得して見たいといふのならば

別問題であつて——人出の多い日を出らんで、イドワルスラブス邊りに出かけて行つて、その低い場所であつて人達がどんなにアンザイレンされてゐるか、またその中段所で、どんな構え方を自我流に自分の誤れる技術を正さうとしてゐるか——をよく冷静に觀察するだけでもこうした人のためにならうと考へるがどんなものだらう。

ロープの扱ひ方には第一に、岩面が樂でバアティ全員が一時に全部動作し得る、コンティニニアスクライムの場合と、第二に岩面が急で困難なため一時にそのうちの一人しか動作し得ないスタカットクライムの場合の扱ひ方があり、第三に、漸次困難の度が増加し、危険が増加する時にはスタカットにコンティニニアスを多少加味せねばならない中間の場合の扱ひ方がある。

連続登攀(コンティニニアス)——バアティの能力に比べて登攀が容易である場合にはバアティ全體が同時に動作しても差支ない。この場合ロープを使用する目的は我々の「道義的」共同を確保し、起り得べき過失からの危険に對して保全を期する手段である。ロープは一の共同を言ひ現はす。この共同によりバアティ各員の合一された保全、その各員の保全は擴大されて、そのうちの一人の犯す過失をよく救ふことができるし、個人の過失からよくバアティ全體を救

ひ出すことができる。しかし、ロープは登攀を直接に援助する手段ではない。バアティの各員は自分量と手心とで自分との前後に連なる者との間のロープの長さを引きもせず引かれもせず恰度よい工合ひに保ち得るやう本能的に自由に調節し得る筈である、この調節が自由に行はれ得ない間はロープは登攀者にとつて却つて障害物である。特に我々の前に連なつて動作する者については注意を要するのであつて、彼の背後からロープのヒツチやチェックをするのは、彼にとつて一つの障害であり、容易に通過し得る場所でも危険を惹起す原因となり得るからである。アルプスや英國の登攀では大部分このコンティニニアスで間に合ふ事が多い。

このロープの扱ひ方は、長く連亘するしかし手強くない山稜の上で練習するのがよい。この練習は巧みなバンス、上手な登攀のくせをつけるばかりでなく、同時にロープの確實な扱ひ方の基本をも教へることになる。コンティニニアスに於ける凡ゆる責任はロープ上の各員に公平に分ち與へられる。リーダーの責任は後の者に最もよいルートを選んでやることだけのやうだが、しかし困難の度が次第に増加したり、また何かの障害が起る場合、バアティ全員の安全を期し、首尾よくその場を克服してバアティと前進させるといふ責任はいつもリーダーの上にかゝつてゐる。

コンティニニアスに動作する間はバアティ各員は自分自身に對して責任を負はねばならないし、その一員が過失を犯した場合にはロープを手早く捌いて、バアティ全員の確保に當るべきは勿論のことである。

隔時登攀(スタカット)——斜面の角度が漸次急峻を加へ、次第に登攀が困難となるに従つて、我々の動作に肝要なバランスを助ける手段は益々少くなつて来る。従つて休んでゐる間できへ我々のバランスは不安定な物となり、まして他の者をロープによつて保全しやうとすることは不適當となる。我々の登り降りには是非とも手がかりが必要であると同じやうに、我々は確實の山の側からロープのホールドを得て、これによつて他の者の動作を確保することが肝要である。一人が墜ちたために、我々の手に握るロープ、腰に巻いたロープの上にかゝつて来るその力は全く意想外の大ききで、それによつて我々は苦もなくバランスを奪はれ、安全な身構から放り出されて了ふ。このことはまた實際によつてもよく分ることである。

「ツチ」と呼び、かゝる處置全體のことを「ビレイイング」と定義してゐる。用語の混用は必ずしも登山者ばかりとは限らないが、我々は山側が提供する突起そのものを「ビレイ」と呼び、ロープを「ヒツチ」すること

を、同じやうにロープを突起に巻いて確保する處置にも用ひることがしばしばあつて、しかもこの後の場合の處置はまた「ディレクト・ビレイイング」として一層廣く説明されてゐる。「ビレイイング」といふのはまた、他の者が山側からヒツチなどの支持をかりることができないで「フリー・スタンス」にある時、この者をロープによつて確保する處置を意味することがある。「スタンス」といふのはどんなに狭い場所でもよいがともあれ一寸でも休む事のできる山側の一部、足溜りの事である。この外に、この足溜りに於ける自身の姿勢のことに使はれてゐる。要するに「フリー・スタンス」といふのは手がかりなしに専ら脚だけによつてバランスをとつた姿勢である。處置を云ひ現はす「ディレクト・ビレイ」とか、これを行ふ仕方を指してゐる「ディレクト・ヒツチ」とかいふのは、身體或は人力といふ人間の媒介なしに、直接に岩に他の者のロープをかけて確保することであると、私

いはに確實な突起にロープを「ディレクト・ビレイ」で結びつけ、或は「ヒツチ」するにしても、これだけでは突然に加へられる大きな力のためにロープは簡単にブツリと切れて了ふことは明かである。これに反して人の體をその間に介在させれば大きなばねかけとして働き、この確保の効果は全く意想外に大きいのである。

従つてとかく危険なディレクト・ヒツチはなるべく避けるのが好ましい。「ディレクト・ビレイイング」は多少コンティニニアス氣味に登る場合、假りにロープをアンカーする位の意味しか認められないが、それでも足の履み違ひが起つても、この處置のために一寸した滑落で済んで了ひ、またロープには僅かの力しか加はらないから、致命な墜落にまでならず済む。急峻な登攀では我々の身體を伸介することによつてビレイイングを出来るだけ「インディレクト」なものにすることは、我々の是非心得置くべき事であり、またこのことは危険の度が増大して來て、我々自身のバランスさへとかく失はれ易くなり、我々自身の保安さへ期待できなくなつたやうな場合には尙ほさらに忘れてはならない。

かくして、ロープの微妙な働きによつて我々は一つの道義的責任を負されることになる。この責任を負される以上、我々自身としては、極力危険の増大を防止せねばならないが、このことはとりもなほさず、我々自身がバアティの他の者達のためにもこの危険の増加を最少限にくひ止めねばならないことにもなる。アンザイレンされてゐる間の我々の第一の義務は現に登攀中の者を確保することであり、その外に彼の陥れる過失

會員大會御通知

左記の通り本年度會員大會開催致すことと相成候間、多數御出席被下度願上候

一、日時 十二月十六日（木）午後六時

一、場所 芝罘溜池 三會堂

一、會務報告・晚餐會

一、會費 一圓五十錢

がバアティの他の者に累しないやうにする事である。自分自身が安全でなければならぬといふ考へは、自分の惹起す危険によつてバアティの他の者を巻添へにするやうなことがあつてはならないといふ責任から生れて来る。かやうにロープに連なつて登る時の確保といふ問題は、我々の上に、錯綜した多角的な責任を壓しつける。破綻に陥つた場合、自己のなすべき様々の要求に自らを適應

させ、個人として如何にその場に行動すべきかを秤量、判断し得るのは一つに我々の膽力が据はつてゐるか否かによつて定まるのである。

急峻な登りでどんな身構が最も理想的かといへば、我々がフリー・スタンスの姿勢にあることである。我々のスタンスを崩れないやうに保つ方法は、腰の部分に最も接近したロープの部分等を何等かの突起にかけて輪を作つた上で『アンカー』或はヒッチすることであり、それは同時に現に登攀中にある者と我々との間のロープを全く自由にし、いざといふ時いつでも我々の力とバランスとによつて彼を確保し得るに足る姿勢にある事である。我々がバランスをとり易いスタンスにありさへされれば、登りにも降りにもともかく我々の背後に連なつて動作しつゝある者を保護するビレイの方法としては『ボデイビレイ』が最も適當である。この方法は、我々の身體にロープをひと巻きしてそれを手にとり、登攀中の者に對してロープをたぐり出したリたぐり入れたリするのである。

者を確保する身構とは必ずしも同じでない。墜落による力が我々にかゝるショックは意外に大きい。従つて我々の位置の上方或は下方を登りつゝある者を保護するためには、何等かのヒッチを得て確保するのでなければ、ボデイビレイの効果は充分に得られない。こんな時、下にある者が確かなヒッチに登攀中の者のロープをダイレクトビレイするのは極めて危険である。萬一の僥倖をたのんで墜落を免れやうとするリーダーはきつとひどい目に遭ふもので、そんなリーダーの下方にあつて、ダイレクトヒッチするより外にビレイの方法がない場合、不幸にしてリーダーが墜落したならば、已むを得ないからそんなリーダーのことは第二として先づバアティの他の者が巻き添へにならないやう處置すべきであるやうに私は考へる。

ボデイビレイをするには、ロープを車骨の上で腰に巻きつけるか、或は一方の肩の下から他の肩の上へ通して、その一端を両手に持つことになる。何れのスタンスが墜落のショックに耐えるに確實で好都合であるかは、我々の間でも意見が分れてゐる。これは要するにスタンスの性質によつて定まる問題である。ビレイはいつでも起り得べき張力の方向に向つて行はるのであつて、それには脚をばね仕掛のやうに構へることが必要で、たまには座つたりこごんだりしてこの動作をすることもあるがこれは臨機の便宜處置で、なるべくさける方がよい。

會員通信

十七日召集されました。出勤方面は北支の決定です。東京を出發する前、偶然小島先生にバスの中でお目にかゝれたのも小生にとつて嬉しい又意義深いことでした。果して山のあるところへ行けるか、それとも蒙古の平原に進入して、ヤングバズバンドやヘディンを偲ぶか、何れにしても會報へ送る位の『たより』は書けそうです。

富士既に白しの報を聞いてビツケルを手にするこの出来ぬのも残念ですが、マイナス四十度の曠野も亦少からず小生の旅情をそよります。會員諸賢の健在を祈ります。

一〇、二二

渡邊 公平

陸地測量部新版地圖

五萬分一地形圖 新版

植柴山（惠順取五號）

五萬分一地形圖 修正

神戸（京都及大阪十六號）

ブタ社（蘇澳六號）

埔里（嘉義一號）

五萬分一朝鮮地形圖 修正

極洞（吉州五號）

載德（吉州十四號）

合水（甲山五號）

（昭和十二年九月三十日）



圖書紹介

Unknown Karakoram.

By R. C. F. Schomberg 1936
14 x 21.8 cm. pp. 244. with a map. Martin Hopkinson Ltd.
London.

「中央亞細亞の山と平原」オックス
インダス河の間」等の著書によつ
て中央亞細亞探検家としての名を知
られて居るショームベルク大佐の筆
になるこの書は一九三四年に二回に
わたつて踏査されたカラコラム北部
地方の探検記から成つて居る。即ち
英領印度と新疆省、アフガニスタン
ソ聯邦とが境界を接するカラコラム
地方でクンジュウト山群の北側ラク
サム、オブラング、ムズタグ三河
の流域地方の探検で、著者によれば
同地域中のある部分は先驅者ヤング
ハズバンド氏とボーランド人グロム
チュウスキイの足跡がある他殆ど未
踏と云つてよいとのことだ（ラクサ
ム溪谷にはデイー・ジイ大佐が入つて

居る）

第一回の経路はスリナガルから
ギルギットを経てフンザ河沿ひに
Morkhun に到つてこゝで準備萬端
を整へた上出發し、Kārun Pir (P-
ass of Karun) を越へ Shingshai
河沿ひにクンジュウト最高峯であり
ヒマラヤ第二十一位の高峯 (Das-o-
ghil (25,888 ft.) の北面を行き Shin-
ghai 着、更にこゝから同名の峠を
越へる。この Shingshai 峠は一五、
九〇〇呎で中央亞細亞と印度との分
水嶺として知られ、東側の水はヤル
カンド河となつてタリム河に入り、
西側の水はフンザ河となつてインダ
ス河に入るわけだ。この Shingshai
峠に近き Pamir-tiang で著者はヤン
グバズバンド氏が一八八七年に築い
た積石を探し求めて、それを發見し
感慨深かつた次第を述べて、その寫
眞を挿入して居る。峠から先は今迄
のカラコラムの斷崖險路に比して亞
細亞的な大平原が開ける。その中を
Mustagh 河の支流の上流 Shingshai
河に沿つて下る（溯つて来た溪と同
名でありながら、お互に反對の方向
に流れて居るものである。このやう
に相對する溪などに同じ地名がつい
て居るのはこの地方の特徴で旅行者
は往々非常に面喰ふと云ふ） Must-
agh 河岸に出てからは流れに沿つて
北上し暫くしてから Oprang 河に沿
つてこれを水原まで溯り Oprang 峠
（一七、二〇〇呎）を越へて再び分
水嶺の印度側に入り Khunjerab 河

の上流に達し、これに沿つて降り再
びフンザ河岸へと出て居る。

第二回目の探検に際しては第一回
探検にとつた Shingshai 河を變
更し、同河とその北方の Chugai-
shai 河に挟まれた二〇、二六〇呎から
出る多くの氷河地帯を過つて Shing-
shai 河上流に出て、こゝで第一回
コースと合して Mustagh 河に出つ、
今度は同河を Butardas で渡つて、
流れに沿つて下り Raskam 河との
合流點まで行き、更に Raskam 河を
溯行したが、最初の計畫である Agni
峠を越へることを斷念して Koktash
から引返して往路をたどつて再びフ
ンザ河畔に出たのであつた。

この探検者旅行の成果としては、
著者自ら卷末に結論を述べて居るが
Baldu 氷河とヤングハズバンド氏
命名の Crevasse 氷河附近の地形の
解明に貢献する處が多く、著者はこ
の地方に於けるスポレット公の探検
（一九二九年）やヴィッツァーの探検
（一九二五年）の誤謬を訂正して居
る。この「地理的、言語的考察」と
題する第十六章はヒマラヤの地形を
研究するものにとつては、附録の地
圖とともに貴重なものであり、ヒマ
ラヤの歴史を研究するものにとつて
は第十四章の「ムズタグ溪谷の過
去の通路」及び第十五章の「昔日の
侵略者」の兩項は或ひはキラパンの
通路を究明し、或ひはフンザ人の侵
略史を説いて居る點で貴重な資料と
云へるだらう。地圖は二五三、四四

〇分の一で南はヒスバア氷河から北
は新疆省の一部ムズダグアータ山系
に及び、西はフンザ河流域から東は
ラスカム河上流に及んで居り製作者
の苦心も覗へる。

ただ旅行記としてこの本を讀むと
きには恐しく無味乾燥で、退屈して
しまふ。感情をどこかへ置忘れて書
いた様な文章にはつくづく閉口し之
では折角人跡稀な地域に足跡を印し
ながら惜しいものだと思はされる。

寫眞ではマルングッテイ氷河から
見たダストオ・ギール及び、クンジ
ユウト第二峯を含むパノラマの二枚
が僅にこの地方の大觀を示すに役立
つて居る。（T. S.）

蒙古高原横斷記

東亞考古學會蒙古調査班
朝日新聞社發行

興倍判 頁 定價 〆

本書は昭和十二年十月東亞考古學
會が昭和六年及び昭和十年の二回に
東は大興安嶺東麓より西は陰山々脈
の西端、戈壁に至るまでの廣大な範
圍に亘つて行つた科學的探査旅行の
旅行記録であつて學術的報告に先立
つて近時吾々の間に注視的となつ
てゐる蒙古に關する趣味的讀物とし
て編輯されたものである。

直接山には關係がないとはいふも
の、日支事變の勃發と共に、而して
内蒙各盟の集合獨立に伴ひ吾々の蒙
古に對する關心はいよゝ深められ
且つ増大せられて來た。否増大せら

れざるを得なくなつて來たのである
東亞の盟主を以て自任する吾が大日
本帝國の手は足はまづ滿洲に觸れ北
支に延び今又内蒙の各地に及ばんと
してゐる。然し乍ら吾々は之位の事
で満足し得るものではない、經濟的
意義を別としても防共の建前から云
つてソ聯との、或る意味での國境は
當分の間だけでも外蒙新強の北邊と
しなければならぬ。此の意味から
して吾々にはまづ以て内蒙に對する
正當なる認識を必要とするものであ
る。

現時巷間に流布する支那ソ聯に關
する汗牛充棟も唯ならぬ際物的讀物
の中に於て斯の如き眞面目な詳細な
旅行報告書を得た事は充分感謝に値
するものと云はなければならぬ。

本書の三分の一を占むるグラビュ
ア版の寫眞は本文の紀行雜記と相俟
つて本書の價値をいゝやが上にも高か
らしめる。

本文は第一章シリ・ゴル紀行、
第二章ウラン・チャップ紀行、第三
章蒙古雜記とから構成されてゐるが
私は自分の趣味から云つて殊に雜記
の「一、地文的に見た蒙古高原」に興
味を覺えた。今までの教科書的な地
形圖のみによつて得て居た蒙古高原
の平面的な概念を本記によつて一掃
する事の出來たのは感謝に堪へぬ次
第である。然し乍ら唯一つ吾々にと
つて残念なのは、軍事的に制限を加
へられてゐるのかと思へるが詳細
な地形圖のない事であらう。（吉澤）



會務報告

十一月定例理事會

十一月十一日 本會事務室

出席者 木暮、小島、武田、島山、黒田、西堀、茨木、島田、角田、(委任) 高橋

一、山岳第一號第二號編輯の件

一、ウェストン記念事業の件

一、會員大會の件

一、長野縣學務課主催、山案内人及觀光從業員講習會へ講師派遣の件

一、新理事推薦の件

一、新入會員薦考

退會者

昭和十二年十一月

一一四二 石川縣

淺野三千三

新着圖書

ケルン十一月號 同編輯室

寫眞月報 同 小西六本店

ツリースト 同 J・T・B

野鳥 同 日本野鳥の會

登山とスキー 同 其社

國立公園十月號 國立公園協會

第五高校山岳部報告 第二輯

The Geographical Journal 10

Natu al History 9-10

Appalachia 10

The Prairie Club 10

編輯後記

本會役員の中から、松方、中屋兩氏は既に北支に派遣され、報導陣に牽引しております。會の事務も手薄の折、中司理事は會報六十九號の編輯半ばにてし、召集を受け、今頃は少尉として第一線に活躍してゐることと思はれます。その結果小生が虎の門から動員され、會報を受持つこととなつた次第です。微力ながらがんばる積りです。

先づ「山岳」の原稿を皆さんにお願いいたします。次に會報へ、隨筆なり、研究なり、山の消息、動靜等ぜひぜひお送り下さい。

今年の會員大會は會務報告後簡單ながら晚餐會を催すこととなりました。多數御出席あらんことを願ひいたします。(角田)

昭和十二年十一月二十九日印刷
昭和十二年十一月三十日發行

發行所 日本山岳會

東京市芝區榮町一丁目三番

電話(四五)六四九

印刷所 多木印刷所

營業種目

報道寫眞

商業寫眞

パンフレツト用寫眞

ト・ロ・繪

圖書 高速度複寫

繪畫 現像・焼付・引伸

日本山岳會員

特別サービス

會員の經營するフォト・サービス・ステイションを御利用下さい。

貴重な山岳寫眞を高級な技術と良心的な仕上げをモットーとして御引受致します。

東京・銀座二丁目・越後屋ビル四階

東京光藝社

加藤恭平

「山岳」バックナンバー

VoL.	No.	定價	送料	VoL.	No.	定價	送料
4	1	2.00	9	14	2	50	12
"	2	2.00	"	"	3	50	"
"	3	2.00	"	15	2	50	9
5	2	1.00	12	"	3	50	"
"	3	1.00	"	16	2	50	12
6	1	1.00	"	"	3	50	"
"	2	70	"	17	2	50	"
"	3	70	"	"	3	50	"
7	1	1.00	"	18	1	50	"
"	2	1.00	"	"	2	50	"
"	3	1.00	"	19	3	50	"
8	1	70	"	20	2	50	"
"	2	70	"	21	1	50	"
"	3	70	"	"	3	50	"
9	1	70	"	22	2	50	"
"	2	70	"	"	3	50	"
"	3	70	"	23	3	50	"

日本山岳會